

# 小泉八雲と永遠の女性

平川 祐弘

## 目次

小泉八雲への高い評価とラフカディオ・ハーンへの低い評価  
ハーンにおける母子関係

『伊藤則資の話』

『孟沂の話』

共通するパターン、共通する願望

キーワード：Lafcadio Hearn, Eternal Feminine, Story of Itō Norisuké, Story of Ming-Y

小泉八雲への高い評価とラフカディオ・ハーンへの低い評価

小泉八雲の帰化名で知られるラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) が描いた明治日本の

面影は美しい。家族のために身を苦界に沈めたのみか自己否定まであえてした君子の生き方はその健気さゆえに心を打つ（『君子』は『心』所収）。『或る女の日記』（『骨董』所収）はおそらく実録であろうが、女のひたすら良き妻であろうとする生き方は薄倅であるだけに哀れ深い。『阿弥陀寺の比丘尼』（『心』所収）のおとよはメルヘンの人のようである。『勇子』の勇気を称揚する人は外国人読者にもいる。

小泉八雲については、そのような日本の女を描いて不朽の名作を描いたという見方をする人が一方にいる。日本の地方の熱心家には八雲を持ち上げる人が少なくない。八雲ファンといわれる人たちである。ところが他方にはバジル・ホール・チェンバレン以来、ハーンの日本女性の像は虚像であると言いつ張る人もいる。西洋の日本研究者に少なくない。彼らは来日して土地の熱心家がきちんとした根拠も示さずただ小泉八雲を褒めあげる様を見て、日本人のナルシズムと言いつ、その知的水準の低さを憫笑し、日本を美化して描いたと彼らが確信するところのハーンをいよいよ小馬鹿にする。そのような悪循環にも似た見解の相違が内外にある。それがハーン認識の第一線にいる私たち研究者の直面する現実問題である。世間には一般読者の無知につけて小泉八雲礼讃を続ける教育家や道徳家も少なくないが、日本内部における小泉八雲高評価と米英におけるハーン低評価のこのようなギャップ、このような認識落差を無視して、彼が描いた明治の日本女性を盲目的に礼讃することは、もはや許されないことではあるまいか。

いずれにしても私は小泉八雲が描く日本女性を礼讃する一部の人の無批判的なナルシズムの輪には入りたくはない。そのような一方的な礼讃の態度にはむしろ道徳的頹廢すら感じられる。美談好みの人は世の無知な人を騙す、偽善的な性格の持主であるかもしれない。世の道徳家といわれる説教好きの人の陥りやすい罠もそのあたりにひそんでいるのではないだろうか。ただし私は、さまざまな批判や悪罵があるにもかかわ

らず、小泉八雲が敬重するに値する異文化解釈者であるとお信じている一人である。<sup>(1)</sup> それでここではハー  
ンの創作の手の内を示すことで、ハーンの憧れの女性の世界とはいかなるものか、平明に説き明かすことと  
したい。

#### ハーンにおける母子関係

ハーンは熊本にいた明治二十六年七月、百貫から船で長崎に渡り、その帰途、三角の浦島屋で休息した。  
その旅の思い出をもとに『夏の日の夢』と題して浦島太郎の話を書いたが、幼年時代の楽園を喪失したハー  
ンは自分を竜宮城の乙姫を失った浦島の身の上になぞらえたのである。ただしハーンにとって竜宮城は海の  
底ではなく南の海に浮ぶ島にある。彼にとってのパラダイスが幼時のギリシャの島だったからであろう。  
ハーンは次のように書いた。文中の「その方」が母親ローザ・カシマチと重なることは間違いない。

私の記憶の中には魔法にかけられたような時と処の思い出がある。そこでは太陽も月もいまよりずつ  
と大きく、ずっと明るく輝いていた。それがこの世のものであったか、それともなにか前世のものであ  
ったか私にはわからない。私が知っているのは、青空はいまよりもずっと青く、そしてもっとずっと地  
上に近かった、ということだ。……海は生きて息づいており、なにか囁いているようだった。風も生き  
て息づいており、風が私にさわるたびに歓びのあまり私は大きな声で叫ばずにはいられなかった。

……そして私をしあわせにしようと、ひたすらそのことのみを考えてくださる方の手で、その土地も

その時も、穏やかに支配されていた。その方は神々しかったけれど、時々子供の私がすねて機嫌を直さない、とても悲しそうにされた。それで私は本当にすまなく思ったことも思い出す。日が沈み、月のぼる前、夜の深いしじまがあたり一面を包むころ、その方はよく私にお話を聞かせてくれた。そのお話の楽しさのあまり私の体は頭の前から足の先まで興奮にわくわくふるえた。私はほかにあのお話の半分ほど楽しい話を聞いたことがない。その楽しさがあまりに大きくなり過ぎると、その方はあやしい不思議な歌をすこしうたってくれたが、その歌を聞くと私はたちまち眠りこんでしまうのだった。だがついに別れの日が来た。その方はさめざめと泣いた……

ギリシャの島でイギリス軍軍医と島の娘との間の子供として生まれたハーンは幼年時代、父は長い転勤で不在、母子二人は密着して、甘やかされて四歳まで育った。それがハーンにとっては至福の楽園で、それがハーンに人間に対する根本的な信頼感を植え付けた。ハーンはいわゆるベシック・トラストのある人でニヒリステイックな人ではなかった。ハーンはダブリンで瞼の母と別れ、イギリスやフランスで良い中等教育を受けたが、後見人が破産したために十九歳の時に一文無しの移民として米国へ渡った。そして一八九〇年に三十九歳で来日する。そんなハーンは、世界文学史的に位置づけると、モーパッサン、ロティなどと同じ一八五〇年生まれの人で、アメリカ時代にモーパッサンの短編を英訳することで短編を書く骨法を学び、ロティを訳することで異国への憧れや印象主義的手法を身につけた。十九世紀後半は一部の西洋人が西洋文明に自足できなくなった時代で、ロティはトルコ、セネガル、タヒチ、長崎などへ行くが、ゴーガンのような絵描きはフランス領西インド諸島を経てタヒチへ住み込む。ハーンも一八八七年西インド諸島へ渡り、同じ

マルティニーク島のゴークンとは徒歩で二十分ほど離れたところで、偶然ながら、暮らした。ハーンが西洋文明を否定的に見ることで古来の日本に共感する様は、ステイーヴンソンがサモアへ渡ること、土地の人の肩を持ち英国のエスタブリッシュメントを批判したことと型としては共通する。このように大観すると、ハーンも時代の風潮の産物であったことがわかる。

### 『伊藤則資の話』

そのハーンは一九〇四年、明治三十七年九月二十六日に五十四歳で東京で亡くなったが、遺稿は翌五年一月の *Atlantic Monthly* に掲載された。それが『伊藤則資の話』*The Story of Ito Norisuke* だ。後に『天の河縁起』*The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories* に収められた。近く日本で映画化されるという話である。<sup>(2)</sup> この遺作が、ハーンが来日する以前にアメリカで書いた『孟沂の話』*The Story of Ming-Yi* にたいへん似通っているのである。その両作品に示された特徴は何か。そこから浮かび上がる作家ハーンの原風景とは何か。それをまず示したい。話の筋はこうである。

宇治に平家方の子孫伊藤則資が住んでいる。凛とした顔立ちの、人好きのする、文武両道に秀でた若者だが、敗者の子孫として、わずかに風月を友として暮らしている。ある秋の夕暮、琴弾山ことひきやまのあたりを歩いていると、たまたま同じ路を行く娘においついた。娘は立派な年のころ十一、二の少女で、伊藤が道に迷っているのかと声をかけると、

「いいえ、わたしはこのあたりに宮仕えしている者で、ついこの先まで参るところです」

という。伊藤も家へ帰る途中だが、この辺りは淋しいから、御一緒させていただきましよう、といって二人は歩いた。そして草花や蝶や鳥のことを話すうちに、樹々の繁みがこんもりと翳を作った小さな村へはいった。伊藤が少女を送って一緒に細い小径にはいると格子造りの門があり、向うに灯りがまたたいている。

「わざわざ遠まわりしてお寄りくださいました。ちよつとおあがりくださいませ」

伊藤はそのさりげない誘いが嬉しくて承知した。御簾の向うに女の影が動き、奥から琴の音が流れてくる。その音がやんで、いつのまにか戻っていた少女が、

「どうぞ奥へお通りくださいませ」

といった。出迎えの老女が多くの部屋を通り抜けて奥の明るい大広間へ案内した。いかなる貴人がこんな侘しい山里にお住いなのか、と伊藤はいぶかしく思った。その時老女が、

「あなた様は宇治のあの伊藤帯刀則資様とお見受けいたしますが、ちがいますようか」

とたずねた。伊藤は先刻の宮仕えの少女に名を明かさなかったので、いきなりそう聞かれてぎくりとした。老女は言葉が続けてこう説明した。

「わたくしのお尋ねをぶしつけとお取りくださいますな。お顔に見覚えがあると存じました。お名前をうかがいましたのは、いろいろ大事なことをお話しあげる前に、まずお人違いでないことを確かめておきたかったからでございます。実は大切なお話がございます。あなた様はこのあたりをしばしばお通りになりますが、姫君さまが御覧になりまして、それからというものあなた様のことを思い続けておられます。思いがつりまして、ついに病の床に伏せられました。心配でなりません。それであれこれ手を尽くしてあなた様のお名前とお住いを調べ、お手紙を差しあげようというその矢先に、あなた様があの宮仕えの少女と御一緒

に屋敷にお見えになりました。お姿を拝見しました時の嬉しさはなにか夢を見ている思いでございます。これもさだめし出雲の縁結びの神様のお引き合わせでございます。なにか差し障りでもありませんれば別、これほど結構な縁組でございますもの、否とは仰せられますまい。姫君さまのお喜びが目に見えるようでございます」

余りに突然な話なので伊藤は返事に窮してしまった。老女の言うことが真実なら、途方もない幸運がおとずれたことになる。栄達の見込みのない、しがたない武士の愛を身分のある家の娘が進んで求めるからには、よほど深く思いつめたに相違ない。かといって女の弱みにつけこんで自己の利益をはかるなどは男の名譽なむらに関わる。それに話全体があまりに謎めいている。こんな唐突な縁談の申出をどう辞退すればよいものか。

伊藤は答えた。自分は独身である、これという女性はいない、親も縁談の話をしたことはまったくなく、今度のお話はいへん名譽には思うが、残念ながら自分は姫君様のお目に留まるほどの分際ぶんざいの者ではない、そのことは自分がいちばんよく承知している……

老女はこの返事に満足したかのように笑みを浮べ、

「姫君さまにお目にかかるまでは、まだお決みなさいますな。一目お会いになれば、ためらうことはなさいませう。さあどうぞ、こちらへおいでください」

と伊藤を大広間に招じ入れ、上座につかせた。そして姫君をお連れして戻って来た。その若い姫を見た時、伊藤は先刻、庭先で琴の音に聞きほれた時のえもいぬ喜びがふたたびわきあがった。姫は伏目がち、頬を染めて、口をきかない。老女はその姫にいった、

「姫さま、思いもかけぬこの時に、あれほどお会いになりたがっておられた方がご自分からお越しになり

ました。なんとという仕合せでございましょう。嬉し涙がこぼれます」

老女は袖で涙をぬぐうと、

「さてかくなる上は、よもや不承知ということはございますまい。お二人で誓言せいげんを交わし、婚礼の宴におうつりくださいませ」

伊藤は答えようにも言葉が出て来なかった。姫のたぐい美しいに茫然とした。夫婦固めの益を交わしたが、かつて覚えたことのない歓びで胸がいっぱいである。くつろぐにつれ次第に気おくれなしに口をきくこともできるようになった。花嫁は話しかけても、頬を染めるか、ほほ笑むばかりである。伊藤は振り返って老女に言った、

「これまでも何度もこの村を通りましたが、こんな立派なお屋敷があるとはつゆ存じませんでした。こうした高貴なお家柄の方が、どうしてこんな淋しいところにお住いになられたのか、それが不思議でございます。また夫婦の契りを交わしましたのにまだ御一家のお名前も存じあげませんが……」

この言葉を聞いた途端、老女の顔に影がよぎった。黙っていた花嫁も顔色を変えた。しばらく無言の後、老女が答えた、

「やはり明かさぬわけにはまいりますまい。わたくしどもの御一門となられたからには、本当のことをお知らせ申します。伊藤帯刀様、あなたの新婦となられた方はあの非命に倒れた三位中将重衡さんみのかみあつむねしげひらの御息女でいらっしやいます」

この「三位中将重衡」の名前を聞いた時、氷のように冷たいものが伊藤の体内を走った。というのはその平家の名將は死んですでに何百年となる。さては自分の身のまわりの一切のものは、過ぎし世の夢か。灯り

も、婚礼の宴の人の姿も、人ではなく死者の影であったのか。だがその次の瞬間にその冷やりとした感覚は去って、またなんともいえぬ魅力が戻って来た。伊藤はもはや恐れを感じなかった。黄泉の国から来た亡霊である花嫁を娶るからには自分も亡霊とならねばならぬ。しかし自分には死ぬ覚悟はできている。この美しい幻の女性を苦しめるくらいなら死んだ方がましだと思った。

「ああ、無念なことでした」

と伊藤は言った、

「重衡卿の無慙な最期のことはいかが이었습니다」

「本当に無慙な最期でした」

と老女も言い、当時やつと五歳になった一人取残されたお姫さまを乳人として世を忍んで育てた話を老女は涙ながらにかたり、その涙を拭って、

「しかし姫君様は願いがかなって背の君を得られました。それがいちばんの幸せでございます。お床入りの用意は整っております」

と二人を寝間に案内する。新枕を交わした折、伊藤が、姫はいつ自分を見初めたのかと聞くと、石山寺を参詣した折だ、という。それは現世のことではなく前世のことだったが、花婿はそんな不思議なことを耳にしても、もはや恐ろしいとは感じなかった。生きている限り、いやこの先いく世を重ねても、この女の腕をわが身のまわりに感じていたい、この人と睦言を交わしたい、と願った。

しかし夜明けの鐘が鳴った時、老女が寝間の襖を開けて言った、

「お別れの時でございます。御一緒に日の目を見ることはかないませぬ。お互いにお別れを申す時がまい

りました」

伊藤は老女の言うことの意味をおぼろげながら合点し、すべてを運命にゆだねることにした。伊藤の意志はもはや伊藤のものではなかった。花嫁は小さな硯を伊藤に渡し、それは父が高倉天皇から拝領した品だと言った。伊藤は返しに自分の刀の筭しうがいを贈った。別れるとき老女が「亥いの年の同じ月の同じ日の同じ時刻にまたお会いしましょう」といった。今年寅とらだからあと十年待たなければならぬ。自分たちには訳があつて京都の近くに移る、と老女は言った。そして約束の日に駕籠を差し向ける、とも言った。

伊藤は新婦の贈物を懐にして家へ帰った。その後、伊藤が琴弾山にその村をたずねるとあの小暗い小径にあった田舎風の門はもう見つからなかった。村人に尋ねると、そんなお邸はもともとなかった、という。

伊藤は日ごとに顔色が冴えず痩せていった。母は嫁を取らせようとしたが、伊藤は「自分は現身うつせみの女とは結婚しないという誓いを立てた」と言った。

ついに亥の年がめぐって来、秋となった。伊藤は床にいたきりである。その伊藤が深い眠りから子供の声で目が覚めたのは、ある晴れた夕方のことだ、見ると枕もとにあの宮仕えの娘がいた。十年前、今はない庭の入口へ伊藤を案内してくれた娘である。辞儀をして笑みを浮べて言った、

「京都のはずれの大原に今度のお家がございます。今晚お迎えに駕籠が参ります」

これが二度と目の見ることのない招きであることは伊藤にはわかっていた。しかしその娘の言伝てがあまりに嬉しかったので伊藤は床から身を起して母を呼び、そのとき初めてかつて契りを交わした花嫁の話をし、貰った硯を見せ、それを自分のお棺の中に納めて欲しいと頼み、ほどなく息絶えた。埋葬に先立ち、その道の権威が硯を調べたが、承安年間じやうあんの作で、高倉天皇の御代にその名の聞えたある工匠の銘がある、

とのことだった。

これが『伊藤則資の話』の筋である。ハーンがこの話を書くに際し、妻に朗読させた原話は『鑑日奇観』巻之第一「伊藤帯刀中将重衡の姫と冥婚」で小泉八雲著『怪談・奇談』（講談社学術文庫、一九九〇年）に原拠として布村弘の手で再録されている。いま原話とハーンの再話の異同を吟味するために、原話を、問題の箇所をたどりつつ、紹介する。

形見の硯のいわれは「高麗こまの国より奉りたる遠山といふ名硯めいげんなるを高倉のみかどが父上に給はりしとぞ」と姫君が伊藤に渡す段階ですでに説明されてしまっている。ハーンの再話では両親が則資の埋葬に先立って調べさせたら承安（一一七一—一一七五）年間の作で、高倉天皇の御代に名の聞こえた工匠の銘がある、としたことで重衡の姫の实在感を読者に印象づけた。その手法については後にまたふれる。

ハーンの再話は巧みなもので原話をふくらまして見事な物語に仕立てている。それでも原話の方が好ましいと思える箇所が一つある。それは『鑑日奇観』では伊藤は姫と新枕を交わし翌朝別れた後も、容貌様子に変化はない。日毎に伊藤の顔色が冴えず痩せてきた、ということは原作にはない。原作は短くて、伊藤は再び妻を迎えることもなく、

あけくれ遠山の硯をその人のおもかげ見ることくいつくしみ身をはなさずありしが、十とせ許ばかりをへて辛亥かのとといふとしの秋の頃いさ、か風のこ、ちしたりしが、させる事にも侍らねば庭のけしきをも詠なめんと障子ひらきたるに、過すぎしとしの女の童わらわいづちともなくきたりて「今宵御迎ひを参らせんとのことなり」といふに帯刀はじめて「猪ぶのとしに」とい、しをおもひあはせ「さては今宵に命きわまりたり」と

はじめて父母にもありし次第を物語で「死したらん後は遠山の硯をも棺にをさめて大原の山に葬り給へかし」とくれぐれあつらへ置いてその夜俄に身まかりぬ。

このはつと気がついたらお迎えの日が来ていた、という方が好ましい。ハーンの再話の「日ごとに顔色が冴えず痩せていった」という症状はしつこさが感じられるからである。

非業の死をとげた平家の一門が現世の人を呼び出すのは、『耳なし芳一』の場合も同じだが、目の見えぬ芳一を呼びに来たのは侍で、それが鉄のような手で盲の芳一の手を引いて思いもよらぬ大きな門構えのお邸に連れて行った。板敷の長い廊下や広い畳敷の間を幾間も横切っていたいへん大きな御座敷へ案内された。そしてそこで芳一に声をかけ、芳一になにをすればよいかを教えたのは老女だった。伊藤則資の場合も御簾のかけから琴の音や上品な女の声が聞え、老女が多く部の屋を通り抜けて家の奥の大きな明い広間へ案内してくれる。ハーンは目が悪かったせいか、和風のお屋敷で部屋から部屋を抜けて案内されるとなにか別世界へはいりこむような感覚をおぼえたらしい。『和解』でも荒れはてた屋敷の部屋から部屋を抜けて奥の小部屋へ行く情景が印象深く記されている。

しかし『伊藤則資の話』でもっとも注目すべき点は、現世の人が平家の亡者と出会うだけでなく、幽冥界を異にする男と女が情を通じることだろう。男が思いもかけぬ宮殿に招じ入れられ、思慮をめぐらす間もあらばこそ婚礼の儀が執り行なわれる、という展開は『安芸之介の夢』にもあった。しかし『安芸之介の夢』の場合は題にも記された通り文字通り夢であった。

## 『孟沂の話』

ハーンの物語には、同じ型に属するものがある。『伊藤則資の話』は来日前の『中国靈異談』（一八八七年）所収の『孟沂の話』と著しく似通っている。こちらの話の筋はこうである。

明の時代、広州に田百禄でんひやくろくという人がいた。田には孟沂という息子がいたが、学識、風采、いずれも同輩を凌ぐものがあつた。十八歳の夏、父が成都の視学官に任命され、孟沂も両親に従つて四川省に赴いた。成都近郊の由緒ある張家で子供たちのために家庭教師を探していたので、孟沂は住み込みで教えることとなつた。桃の花の咲くころ、初めての休暇で、孟沂は両親を訪ねに成都へ向う途中、林の奥の花かげに美しい婦人を見かけた。かたくなつた孟沂は、張家の主人から祝儀にもらつた銀貨をうっかり落としてしまった。銀貨を拾つた婦人の小間使いが後から追いかけて届けてくれた。休暇があげて成都から近郊へ帰る時その道を通ると、美しいご婦人が玄関先に立っていて、会釈すると小間使いが孟沂に声をかけて中に招き入れてくれた。ご婦人と会話するうちに、興が乗り、孟沂は引き留められるままに親しく話を交わした。「お客様は孟沂様。張様はわたしどもの同族、あそこでお子たちを教えておいでの孟沂様はわたしどもの先生も同じでございます」

孟沂が女主人に張家とどのような御関係かと問うと、自分の家は平ひらといい、文孝坊の薛家の娘で平氏の康かたという者のもとに嫁ぎ、その縁で張家とも縁続きになつたが、不幸にも嫁いですぐ夫に先立たれ、ここは淋しいがやもめ暮しの居に定めている、といった。相手が未亡人と聞かされて、招待された身でない以上、長居をしてはならぬと思つたが、女主人は銀鈴を鳴らして小間使いに詩の草稿を届けさせる。それは唐代の元

積じん、杜牧とぼくなどの真筆である。五百年前に四川省の節度使を勤めた高駢こうべんの墨痕淋漓とした真蹟を手にした時は女の目になんともいえぬ輝きが光った。二人は詩を夜の更けるまで吟じた。孟沂は一度ならず辞去しようと思ったが、女はさらに酒をすすめる。そしてついに寝室に請じいれられて二人は懇ろに飲をつくした。そしてそれから孟沂は、親には張家で泊るといい、張家には親の家で泊るといつわって、毎夜のように密会を重ね、共に詩を語り酒を酌み、半年を過した。ところが張家の主人が、

「お宅の御息は毎夜町まで歩いて御帰宅になりますが、朝夕の往復は辛うございましょう。雪の降る間ぐらいは拙宅に泊るようにされてはいかがでございませう」

と言ったので、孟沂の父は驚愕する。息子は町へ戻って来たことも家へ寄ったこともない。「さては悪所通いの悪癖を身につけたか、毎晩、飲む、打つ、買うか」と心配する。

そこで張家では下僕に命じ夕方家を出る孟沂の後を尾けさせる。ところが径の途中のいちばん暗い辺りで、孟沂の姿は、まるで大地に呑みこまれてもしたかのように、忽然と消えてしまう。下男は狐につままれのような思いで引返し、一伍いちぶ一什じゅうを主人に述べた。張家の主人はただちにその事を田百禄のもとへ報じた。その間、孟沂は愛する人の室に入り、女が涙にむせんでいるのを見て、驚きかつ心を痛めた。

「孟沂さま」と女は啜り泣き、男の頸に手をまいて言った、

「わたくしたちはもうこれで永ながのお別れでございませう。わけは申せませぬが、こうなることは初めからわかっておりました。それでもお別れはいかにも辛うございませう。泣けて泣けていたしかたございませぬ。今宵かぎり二度とお目にかかることはできません。孟沂さま、あなたさまはいつまでも命あるかぎりわたくしのことを忘れずに覚えておいででございませう。あなたさまは必ずや大学者になられます。世の誉れ

や富はあなた様のもの、そうなればきつとどなたか美しい優しい女の方がわたくしに代ってあなたさまをお慰めすることでございましょう。さあ嘆き悲しみはもうよしにして、これが最後の一夜、楽しく歎を尽くすことといたしましょう」

この最後の数刻は天上の歎を尽くすがごとき思いであった。朝が来、女は泣き、別れの口づけをした時、男に別れの贈物をそつと渡した。——小さな瑪瑙の筆立である。だが孟沂には永の別れとは思えない。しかし張家に帰ると、玄関の外に父と主人が待っている。詰問され杖で激しく打たれ、息子は口ごもりつつ、初めての出会いから昨夜にいたる一切を打明けた。張家の主人は青年の話を聞いて、自分には平という親戚はいない、そんな女は知らない、と否定する。孟沂は女がくれた贈物や女が書いた詩を見せた。詩はまごうことなき絶品で、唐代詩人の流儀で書かれている。三人は薛女の住居を訪ねることとした。

径はいちだんと影深くなり、大気も芳しくなった。苔の緑はひとときわ鮮やかで、野生の桃の実がそれこそ桃色に熟していた。だがその辺りに来た時、孟沂は林ごしに向うをじつと見つめて、思わず驚きの声をあげた。今朝別れた時まで蒼い藁の屋根が青空を背景に浮んでいたあたりに、いまはなにもない。見えるのはただ抜けるばかり青い空のみである。緑と金の玄関があったあたりは、ただ木の葉が秋の明るい金色の光の下で風にそよいでいるばかりである。そして石段が下りてきたあたりはわずかに廢墟が——誰かの古い墓の崩れているのが見えるのみである。苔蒸して石は朽ち、かつて刻まれていたに相違ない名前は今となつては読むこともできない。女の館は消え失せてしまったのだ。

その時張家の主人ははたと額を打ち、頷きつつ鄭谷の詩を口ずさんだ。

「小桃花薛涛ノ墳ヲ遠ル」

そして「御息を惑わした女の正体がわかりました。女の墓はいまそこにくずれかかっています」と次のように説明する。平氏の康に嫁いだといったが、そんな名前の一族はこのあたりにいない。しかし平康巷なら成都の繁華街である。女は文孝坊の薛家の娘だといったそうだが「文」と「孝」の二字は合わせると「教」になる。平康巷の教坊は唐代に妓女たちが住んだ一劃だ。高駢の詩を吟じたというが、贈物には「渤海高氏清玩」の六字が篆刻されていた。渤海出身の高駢は成都にいたとき深く妓女薛涛を愛した。この詩を女に贈ったのも高駢だ。薛涛は死んだが、霊はこの森の中でいまも生きて詩を解する若者に言い寄っている。孟沂が逢瀬を重ねともに詩を論じた美女は薛涛の霊だったのだ……

父親は孟沂を直ちに広州へ送り返した。青年はその才学識によってやがて高い位に上がり、名家の令嬢と結婚し、子供たちも儲けたが、心中では薛涛のことを忘れることができない。その机の上には薛涛から贈られた品物が大切に飾られている。

これがハーンの初期の名作で、原作は『今古奇観』第三十四話で、ハーンはその仏訳を利用した<sup>(3)</sup>。再話<sup>(3)</sup>は、描写こそ豊かにふくらましてあるが、筋は原話とほぼ同じである。ただしハーンの再話の方が品格が優れている点がある。それは原話は、孟沂は自分が若かりしころ薛涛という唐代の妓女と懇ろになったことを人に話しては女から贈られた品物を証拠として見せた、という話で終わっている。それに反しハーンの再話の主人公はそんな自慢はしない。「机の上に飾られた置物について子供たちがお話をせがんでも、そのいわれを口にしたためしはついぞなかったということである」で終わっている。女の思い出をいつまでも胸に仕舞

っておくハーンの主人公の態度には女に対する貞節が感じられ、それで孟沂の人格のみか作品の品格そのものまでが『今古奇観』に比べ数等高雅になっている。

### 共通するパターン、共通する願望

『孟沂の話』と『伊藤則資の話』とを比べると、両者は共通したパターンから成ることがわかる。二作とも独身の風流を解する青年が主人公だが、道すがら美しい樹々と庭に囲まれた邸に招じ入れられ、そこで見知らぬ女性と懇ろになる。その際手引きするのは両作とも少女である。主人公はすでに死んだ女と契りを結ぶが、それは単なる夢ではない。その証拠に孟沂も伊藤も女から別れ際に大切な品を記念として頂戴する。相手がこの世の女でないことは孟沂の場合には交際のはて後に、伊藤則資の場合は交際の途中に判明する。女はいずれの場合も数百年前の過去の人で、孟沂が戴いた贈物に刻まれた文字も、伊藤則資が頂戴した贈物の硯に刻まれた銘も、女が生きた古い時代を証するものだった。その品がああ世の女と通じたという二人の冥婚談にあるリアリティーを与えてくれる……

わずか二十年ほどであったハーンの短編作家としてのキャリアの最初と最後に、これほど似通った再話作品が書かれたということは何を意味するか。『孟沂の話』と『伊藤則資の話』がこのようにテーマ、構成、形見の品という仕掛けまで相似たということについては、両作品の原話『今古奇観』と『鑑日奇観』の原話が似通っていたからだという指摘も可能であろう。『今古奇観』は明末に抱養老人の手で編まれたが、明和七年、一七七〇年に草官散人によって書かれた『鑑日奇観』原題『垣根草』には、中国小説の翻案という面

もあつたからである。それに再話作品には原話がある以上、ハーンに選択の余地はそれほどなかった、という見方もあるかもしれない。しかし両作品に共通するある種の点は、ハーンの終生の好みや心奥の願いが奈辺に存したかをやはり示唆している。それというのも再話作品にも翻案者の個性は刻印される余地があるからで、その点を問題としたい。

ハーンの再話には原話より長い作品が多い。筋は同じでも描写が加わっているからである。そんな retold story から原の story を引くと、ハーンが付け加えたものが残るから、再話者による付加価値はその引き算によって殆ど算術的に実証できる。そしてその付け加えたり原作を変えたりした部分にこそハーンの個人的特色がおのずと示されるのである。

『孟沂の話』の場合、ハーンは情景描写を細かくし、孟沂が初めて婦人を見かける森の描写など原文のおよそ五倍にふくらました。ハーンは仏訳に依拠したが、読者の便を考慮して、ここでは中国文からの立間祥介訳『今古奇観』（平凡社、東洋文庫）を引用する。

途中、桃の花が咲き乱れているのが遙かに見えたので、近づいて行ってみると、いかにも閑静なところ。嬉しくなり、しばらく足を止めて眺めるうち、林の奥に花かげに美しい人が立っているのに気がついた。しかるべき家の婦人だと見えたので、まじまじ見るのは失礼と行き過ぎようとしたが、……

この一節がハーンの手にかかると次のように長くなる。拙訳を引用する。

その日、大気は花の香にうっとり満ちて、蜂の唸る音が眠たげに聞えた。孟沂には自分が行く径がもう何年もの長い間、誰にも踏まれたことのない径のように思われた。草が高く路上に茂って、径の両側には巨木が聳え、頭上ではその苔蒸した力強い腕を組み交わし、地面にはその影を落としていた。しかし葉の繁った暗いあたりでは小鳥の囀る歌で葉がふるえていた。森の向うに開ける奥深い見晴らしは金色の蒸気に輝き、香を薫ずる寺のように花の吐息でかおっていた。昼日中の夢心地の歓喜の情が孟沂の心中にしみこんでくる。青年は若い花々の間に腰をおろした。見上げると董色の空を背景に枝々がゆったりと揺れている。香りと光の中で思うままに大気を飲み、思うままにこのまろやかな大いなる沈黙の嬉しさを味わった。しかしこうして憩っている間にもふと物音がする。振向くと向うに影深い場所があつて野生の桃の花が咲き乱れているのが見えた。そして目をこらすと、うら若い夫人——桃色に染まった花そのものと見まごうばかりの美しい夫人が、花蔭に身を隠そうとしている。

孟沂はいそいで視線をそらそうとしたが、身の動きがぎこちなくなり、銀貨をうっかり落としてしまったことはすでに述べた。銀貨を拾った婦人の小間使いが後から追いかけて届けてくれたので、孟沂は休暇明けにもまたこの径を通る気になったのである。その条りも『今古奇観』にはないハーンHaanの創作である。

あの優雅な女性が一瞬目の前へ現われた場所で孟沂が一休みしたのは、以前のような温かい日和の日であった。だが休み明けの今回は、巨木の森の奥深い見晴らしのその奥に、前回は気がつかなかった館が見えるではないか。驚いてよく見ると別荘風で、それほど大きくはないが、いかにも気が利いてい

る。その曲線を描いてそりあがった、鋸状の刻みのついた二重屋根の油味を帯びた青い瓦は、葉の繁みの上に聳えて、昼日中の光に満ちた紺碧の空と溶けあって一つの色になっている。柱廊が前に張出した玄関の柱の模様は、緑と金とに染めわけられて、日光を燦々と浴びた葉と花にまごうばかりで、いかにも芸の細かな細工である。その前のゆったりとした幅広い石段の一番上には、大きな焼物の亀が左右に並んで据えてある。その大亀に護られたかのようにして立っているのが、この邸の女主人——孟沂が夢<sup>む</sup>寐<sup>び</sup>にも忘れたことのないあの女性——なのであった。

理想の女性は森の奥のお屋敷に住んでいる。中国の原話ではせいぜい墨絵に淡い色が添えられた程度であったのが、ハーンの筆にかかるると確かに油絵のような濃厚な風景に変わった。ハーンが中国起源の作品を再話する場合、一方には桃源郷とか遊仙窟のような理想郷があるが、他方にはエドガー・アラン・ポー風の幻想庭園のような理想郷もあって、それが混在していた。ハーンが愛読したポーの「自然美の物語」に分類される作品、『アルンハイムの地所』とか『ランドーの小家』といった作品も思い出されるのである。このように見えてくると再話作家ハーンが彼独自の工夫を凝らしたのは男と女が出会う場所の記述であった。『孟沂の話』で桃の林の奥で初めて女性を見かけた。その場所や館を詳しく描いたのは、そこがこの世とあの世とを橋渡しする特別な場所だったからである。そこに一つの樂園ともいべき理想郷を描き出した際の手法は、若き日の印象主義作家ハーンの特徴である文字による絵画的描写 word-painting<sup>(4)</sup>であることはすでによそで触れた。

ところがそのハーンは来日して十四年間暮らすうちに描写の手法が墨絵のように簡素になり、実質だけを

描く人に変わっていく。最後の作品『伊藤則資の話』には極彩色の描写はない。伊藤が宇治へ帰る途中、琴弾山のあたりでたまたま同じ路を行く娘に追いついて声をかけ、さわやかに喋りしながら村へ入ったことは前に紹介した。ハーンの工夫はここでもあの世の女性とこの世の主人公が出会う場所の描き方にもあるので『伊藤則資の話』には原話にない日本の暗い森についての説明が「ここで私は、物語を中断して言っておかなければならない」と括弧にはいつて補足されている。仙北谷晃一訳を引用する。

それは、日本ではどんなに晴れ渡った暑い天候の日でも、依然として暗い村があつて、しかもその暗さは実際に見た人でなければ想像もできない程だということである。東京の近辺にさえ、そうした村は沢山ある。このような村からちよつと離れると家は一軒もない。常緑樹の厚く茂った森の他には何も見えない。そうした森は、若い杉や竹が多いが、嵐から村を守り、加えて様々な用材の供給源ともなっている。森は通り抜けることがむづかしい程びっしりと植えられている。マストのように直立し、重なりあつた樹冠が屋根のようになって、日光を遮さへぎっている。藁葺わらぶきの田舎家は、いずれも人造林の空地に建てられ、ぐるりと取り巻いた木々が家の高さの倍する垣根を作っている。木蔭に入れば真昼間でも薄暗く、朝か夕方には家は半ば陰になる。こうした村の第一印象には、ほとんど不安に近いものが混じるが、それは、一種独特な不気味な魅力がないではない透明な暗さのせいではなく、ひっそり閑かんとした静けさのせいである。五十戸から百戸の家があつても、人影は見えない。聞える音といえは、姿を見せぬ鳥の囀さえずり、時たまの鶏の鳴き声、しきりに鳴く蟬の声くらいのものだ。しかし蟬でさえ、こうした森を暗いと思うのか、鳴き声がかすかである。性来日せいらいひを愛する蟬は、どちらかという村の外の樹を好むの

である。言い忘れるところだったが、時に、眼に見えぬ機織りの杼の音が――チャカトン、チャカトンと――響いて来ることがある。しかしあの聞き慣れた音も、この緑一色の静寂の中では妖精のしわざめいて聞えて来る。村が静まり返っているのは、要するに無人だからだ。大人は皆、体の弱った老人を除いて、近くの野良へ行っている。女たちも赤子を負ぶって出かけている。子供たちの大半は、一番近くの、といっても半里は離れているであろう学校へ行っている。……

ハーンは明治の東京近郊の村からこんな印象を受けた。アイルランドやイングランドに比べて日本の森の方がなるほどこんもりと暗い。左眼が見えず右眼も極度の近視だったハーンは、その鋭敏な神経で、日本の村の暗さや静けさにはほとんど無気味な印象を実際に受けたのかもしれない。ハーンにとってはこれはリアリステイックな事実に即した記述だったのかもしれない。与謝野晶子は昭和初年荻窪の南に住んで「木屋と稲と水との香が交り合った空気を全身に感じて武蔵野の風景画に無くてはならぬ黒い杉の森を後にしてゐた」と風に吹かれながら書いている。森は命ある無気味な森でもあったのだ。しかし日本の村の森に慣れてしまった私たちから見ると、ハーンが「一種独特な無気味」を誇張とはいわずとも強調しているように思える。古代ギリシャでは正午のところに物の怪が出没した。日本でも泉鏡花などを読むと真昼時の死んだような時間の停止感に一種異様な無気味さがある。真夏日の昼の戦慄という感覚は日本人にもないわけではない。

しかしハーンは当初は日本の村を取り巻く森なるものを客観的に記述する。括弧の中に挿入した文章だけにハーンが実際に見聞きしたという実感が強い。そうした余談を経ることで、ハーンはその次に来る伊藤と少女がはいって行った「木々の繁みがこんもりと翳を作っている小さな村」の实在感を強めようとしたので

あろう。森の中に意外や貴人の館があった、ということがいかにもありそうな印象を与えるための工夫といってもよい。『伊藤則資の話』の前半がこのようにリアリティックに記述してあればあるほど後半のファンタスティックな展開とのコントラストが大きくなり、それだけ物語としての意外性もますます、面白味もますます、という計算もあったのではあるまいか。原話『鑑日奇観』では主人公が少女に案内されて重衡の姫が住む「松杉の一村しげれるほとり」にはいつて行く糸りはいとも簡単である。それに対しハーンは原話には示されていない別天地の演出を再話『伊藤則資の話』では試みたのだ。『孟沂の話』では女が住む別世界は理想郷として描かれた。美しい桃の林の「長いトンネルを抜けると」向う側に別天地が開かれた。それに対して『伊藤則資の話』では静まり返っている日本の人気のない村と森を抜けると、そこにお姫様が住む別天地が開かれた。ただし最晩年のハーンはもはや極彩色を用いる言葉の画家であることをやめたから、この世からあの世へ通ずる径を、人がいそうでいない村を単彩色で記述することで置き換えたのであろう。しかしそんな村には真昼時にもどこかに魔性のものはひそんでいる。とすれば日本の村の一見写実的な記述や説明も怪談を構成する一エレメントになっている、といえないこともない。以上がこの世の男があつた世の女と出会う先に先立ち、その場所を描く際にハーンがこらした工夫である。

幽冥境を異にするといわれる境の森を描く際に、三十代のハーンは油絵のように濃厚に理想郷を美しく描いた。それは四川省成都の近郊というよりルイジアナかフロリダの光景を思わせた。五十代の小泉八雲は淡々と明治日本の東京近郊の村を描いた。描写の手法はそうに変化したが、しかしこの世ならぬ女性に憧れるという主題は同じである。

ハーンは四歳の時、瞼の母と生き別れた。その時に心に受けた傷が大きくて、終生母性的なるものの愛、

女性的なるものの愛を求め続けた。今生では二度と会えないような女性を思慕し、そのような女性に抱かれない、身も心も一つになりたいという憧れを持ち続けた。ハーンはよく気がつく優しい人に甘えたかったのである。日本の多くの男も幼年時代に母親に甘やかされて大事に育てられたせいか、この種の願望をひそかに持っていた。「甘え」は土居健郎氏も指摘するように人類普遍の感情だが、日本の男には顕著な感情である。それだけに日本文学の代表作には川端の『雪国』とか露伴の『対體』とか鏡花などの作品にその種の感情が色濃く滲み出ているのであろう。

このような母への思慕が、母の愛に包まれない、優しい女の人の愛にくるまれない、という気持となり、中国文学に材を求めて再話した時も薛濤のような女を描き、日本文学に材を拾って再話した時も、あるいは一度死んだ許嫁とまた結ばれる『お貞の話』となり、また『伊藤則資の話』のような「愛は死よりも強し」というあの世の女と結ばれる冥婚談と化したのではないか、と思われる。

瞼の母を慕う、という気持は人間の本能に訴える。日本文学の古典『源氏物語』の主人公光源氏も、瞼の母の桐壺を慕い、桐壺とそっくりな藤壺に惹かれる。母を慕うということと憧れの女性と肉体的に結ばれる、ということは、母子相姦的だが、夢の中の願望ではその二つがまじりあっているのがハーンの文学の特色で、別れた母を慕う気持が竜宮の乙姫を慕う気持に転位しているのである。

幼くして母と生き別れたハーンは、母性的なるもの、女性的なるものを求めて、永遠の女性を求めて文学作品を書いた。ハーンが日本人の多くの読者に永く愛されるのは、そのような憧れを終生心に秘めた作家だったからではあるまいか。「わが終わりにわが初めありき」という言葉があるが、ハーンの生涯をたどり、初めの頃の『孟沂の話』と終りの頃の『伊藤則資の話』とを読み比べると In my end is my beginning と

う英語が思い出されてならないのである。

## 注

(1) ハーンは来日前にマルティニーク島で奴隷解放暴動の際に焼き打ちされた主家で自分に託された白人の子供とともに火の中で死んだ乳母ユーマをヒロインとした小説を書いた。『ユーマ』には多くのフィクションが混ざっている。それも論難の種にされた。革命側や黒人側からすれば白人の為に身を犠牲にした黒人女は第一義的には腹立たしい存在であり、そんな女を美化したハーンも非難された。しかしハーンが創作したユーマという人間像には人種の如何を問わず胸を打つ真実がこめられている。それが貴いのである。私はハーンをマルティニークの異文化解釈者としてもたいへん尊重している。

(2) 映画の題名は『伊藤の話』で監督は秋原正俊、主演は温水洋一で原作は現代風に脚色された。埼玉県熊谷市の女子高校で教鞭をとっていた伊藤則資は書物を刊行したことが認められ青森県の八戸大学に教授として迎えられる。助教授の寺島康子に市中を案内され、よい気分になっていると、前任教授が失踪して、自分はその後任として迎えられたことを知らされ驚く。失踪の鍵を握る女が岩手県久慈市の琥珀館にいと聞き、伊藤はたずねに行くがわからない。帰り際、時代錯誤的な言葉を話す少年に出会い、伊藤

は少年に導かれるままに古い屋敷へ向う。そこには先ほどの琥珀館の女がいた。伊藤はそこで美しい娘と一夜を過ごすことになる……私はまだ映画を見ていないので話がその後どう展開するかは知らない。

(3) ハーンの Story of Ming-Y とその原話である中国明朝の『今古奇観』第二十四話とハーンが利用した後者のオランダ人 (Gustave Schlegel) の手になるフランス語訳の關係については、平川祐弘『小泉八雲とカミガミの世界』(文藝春秋、一九八八年) 一〇五―一一二頁を参照。

(4) 同右。